

審査の結果の要旨

氏名 森田 正哉

本研究は、思春期児童における不適切なインターネット利用が児童の不注意・多動傾向および抑うつ症状との間にどのような因果関係があるかを同定するため、大規模思春期コホート調査である東京ティーンコホートを用いて交差遅延効果モデルを用いた解析を行ったものであり、下記の結果を得ている。

1. 東京在住の 3,171 世帯を対象とした大規模思春期コホート調査を実施し、対象となる児童が 10 歳時点から 2 年間の追跡調査をした結果、思春期児童の不適切なインターネット利用と不注意・多動傾向の 2 者間において、縦断的に双方向性の関係を認めた。これは性別、月齢、両親教育歴、世帯収入、画面閲覧時間、抑うつ症状を共変量として投入しても、縦断的に双方向性の関係を認めた。
2. 上記と同様の対象について、不適切なインターネット利用と抑うつ症状の 2 者間において、縦断的に双方向性の関係を認めた。これは性別、月齢、両親教育歴、世帯収入、画面閲覧時間、不注意・多動傾向を共変量として投入しても、縦断的に双方向性の関係を認めた。

以上、本論文は、思春期児童において不適切なインターネット利用と不注意・多動傾向、および不適切なインターネット利用と抑うつ症状のそれぞれにおいて、双方向性の因果関係があることを明らかにした。特に不適切なインターネット利用が不注意・多動傾向を予測する結果についてはこれまでに実証されたものではなく、双方向性の関係を示した初の研究であるといえる。以上のことから、一方の症状を見出した際に時間経過とともに他方の症状が新たに出現する可能性が見出され、インターネットが取り巻く環境における思春期児童のメンタルヘルスの向上に重要な知見を提供すると考えられる。

よって本論文は博士(医学)の学位請求論文として合格と認められる。